

## 細川林谷伝の検討 —旅と盆石趣味を中心に—

久保 佐知恵 (早稲田大学)

篆刻家の細川林谷(一七八二-一八四二)は漢詩や絵画も嗜み、とりわけ旅で目にした風物を描いた山水図が数多く遺っている。本発表では、林谷の生涯にわたる旅と盆石趣味に注目し、新出の「奇石図巻」(個人蔵)を手掛りとして、林谷が理想とした文人像について一考を提示したい。

中国の文房清玩の一環として発展した盆石趣味は、江戸時代には世間一般に浸透した。頼山陽は愛石家として知られ、谷文晁の瀑布石など画家が盆石を愛蔵した例もある。

林谷の盆石趣味は、その所蔵数や探石への執念の点で特筆に値する。文献上では、林谷の遺稿集『詩鈔印譜』に「山房玩石三十之一」という副題をもつ漢詩が二首収録される。また、広瀬旭荘の「題林谷山人石譜」詩には「凡有石處親探視」「山人好游忘遐邇、北過北越南南紀、欲同石行重難徙、乃揮彩毫展素紙」とあり、林谷が石を求めて旅したり、愛石の写生図を旅の供として持参していたことがわかる。

「奇石図巻」は天保六年(一八三五)五月、長門の客舎にて自家愛蔵の三十石を描いた作品である。林谷特有の潤いある粗放な筆致と、鮮やかな色彩が一際目を引く。各石にはそれぞれ題詩が記され、形や紋様、産地、中国文人の愛石譚などが詠み込まれている。例えば「我家醒石盤」と詠まれた一石の形は、唐の李徳裕が珍藏した醒酒石(『素園石譜』)と近似しており、林谷が中国の名石と同趣の石を蔵したことがわかる。特に産地に注目すると、生駒十三峠の太乙禹餘糧や、富士山の丹砂、讃岐の磬石、安倍川の馬蹄石などの他、勿来関や越州、遠州、南紀の産とわかる石も見出せる。

旭荘の漢詩にあるように、これらの石は林谷が旅先で探し求めたものと推測される。というのも、林谷には、陸奥や越後など北日本を遊歴した記録として「林谷山人紀遊漫画」(高松市歴史資料館蔵)が、富士山や讃岐など西日本を遊歴した記録として「西国順礼詩画帖」(個人蔵)があり、石の産地と符合する。また前者には、信州姨捨山で米芾に倣って山上の姨石を礼拝した図が、後者には、肥前浦上村で神功皇后の故事にまつわる鎮懐石を得た図が含まれ、土地に所縁のある石への強い関心がうかがえる。

以上から本作は、中国舶載の画譜を写した理想の石ではなく、自家愛蔵の石、それも自らが旅先で探し得た石を描いた作品であり、その点で旅の軌跡という意味合いが強い。林谷の旅には探石をたのしむという目的があったことが、絵画の面からも実証されるのではないかと。

最後に、林谷が石を求めて旅した意味を検討する。本作の題詩には、北宋の愛石家米芾の名がしばしば登場する。米芾は古書画の模写に長けたことでも知られるが、林谷が趙丕烈の画帖を偽筆し田能村竹田がそれを見抜けなかったという逸話(『竹田莊師友画録』)は、米芾を彷彿とさせ興味深い。林谷の旅と盆石趣味の関係から、江戸後期の文人が志向した中国趣味の多様性を考察したい。